

紀伊民報

エダアシクラゲ



△
普段は海藻などに付着して暮らすエダアシクラゲ

エダアシクラゲは傘の大きさが数ミリの程度のヒドロクラゲの仲間であるが、一般的なかクラゲと変わった特徴を多く持つ。

まずは、通常のクラゲが4

久保田 信

17



本の放射管を持つのに対して2倍以上の放射管がある。それと同数の触手が傘縁から伸びる。これら傘縁の触手は8〜11本で、すべてが何度も分岐する。それぞれの触手には吸盤があり、これで海藻などに普段は付着している。触手の基部は膨らんで触手瘤(りゅう)となっているが、その外側に眼点が1個ずつある。光を感じ取り、光が射す方向へ移動する。

体の中央にある円筒状の口柄を取り巻いて生殖巣がつくられる。その口柄の先端にある口触手は傘縁触手の数と異なり、常に6本しかない。口触手はマチ針状で短く、その先が膨らんでいるが、その中には強

力な毒針である大きな刺胞(しほう)が詰まっている。獲物を確実に仕留める。

エダアシクラゲは付着性のクラゲといってもいいので、プラシクトンサンプルに通常は現れない。遊泳を頻繁にしないこともあり、飼育、観察も容易である。

ポリプも飼育が容易で、形態は極めてシンプルである。ヒドロ花にはたった4本のマチ針状の短い触手がある。しかし、強力な刺胞なので餌を上手に捕らえ、体がばんばんになるまでのみ込む。

ポリプは群体性だが、直立する個々の個虫は分岐して樹状にはならない。京都大学瀬戸臨海実験所の海水の蛇口から出てくる海水をろ過しないで使用すると、このポリプがいつのまにか出現していることがよくある。

ただ、このポリプととり二つだが別属別科のジュズクラゲの一種がいる。不思議な他人の空似である。

(京都大学准教授)